

太平洋人物誌

横尾東作

硫黄島を日本領土に

(一八三九〜一九〇三年)

横尾東作は天保十年(一八三九)陸

中下新田村(現・宮城県鳴瀬村)に生まれ、仙台藩儒・新井義右衛門から漢籍を修め、江戸に移って昌平黌頭取・林学斎のもとで業を重ねたが、さらに藩命によって横浜の米人宣教師サムエル・ブラウンから英学を勤んだ。

慶応四年(一八六八)仙台藩英学教授となり、同年新潟が開港するのに応じて、外国人との応接に従った。同年五月、「奥羽越列藩同盟」が成立すると、同盟の檄を外国公使に発するため横浜の居留地四十四番のエドワルド・スネル(当時、オランダ領事と自称)宅に潜んで工作を図った。功は奏せず、かえって官軍から五百両の懸賞金を掛けられる破目におちいった。

維新後の明治四年、友人と早稲田に北門社(のちの東京専門学校、早稲田大学)を起して英学を教授した。翌五年、仙台藩の辛末館、養賢堂、医学校などで英学教授を勤めた。間もなく神奈川県に勤めたあと、横浜野毛山に

英語塾を開いた。明治九年警視庁に出仕して記録課長に進んだ。同十九年に、警視庁を四十八歳で辞任して、ここで専ら南洋の経営に没頭することになった。

それを前にして、横尾は『訓蒙天文図解』『景象論』『童蒙教育問答』などの翻訳に当たっており、英学を通じて海外の情勢に詳しくなったことに加えて、駐ロシア大使・榎本武揚がスペイン領のマリアナ群島(現・北マリアナ諸島コモンウェルス)の風聞について耳にしていることを知った。

榎本は駐英公使・上野景範に意を通じて、スペイン外相に噂の所在を探らせ、スペイン外相は商議に応じる意向を示したので、日本政府はマリアナ買収問題を取上げた。ところが、西南戦争を前にした政府は、南洋に手が届かず、榎本の献策はそのまま保留になった。

この問題が横尾(警視庁に勤務中)に伝えられ、横尾は有志者との連携を計った。赤松則良(榎本とオランダに留学、当時海軍少将)、荒井郁之助

(函館戦争で幕軍軍艦「回天」司令官、初代気象台長を辞官のあと)ほかに北門社の友人が会合に加わった。

横尾はマリアナばかりでなく、太平洋で所属未定の島嶼を経略する計画を立てており、「探討船」を出す準備を整えた。明治十八年十二月、横尾は『南洋公会設立大意』(約一、六〇〇字)を著し、翌十九年これを全国に飛ばして、同志の獲得を企んだ。高名な菅沼貞風『新日本凶南之夢』の現われたのが明治二十一年で、それよりも早い構想である。

その『設立大意』の後編は、実際の植民方法を詳述したもので、まずフィリピンのシバラワン島、スールー島、ミンダナオ島で島民から地所を借り、植民の第一区とする。第二区はカロリン群島、マーシャル群島に植民する。マリアナ群島には、譲渡される説があるので、それを受ける。

さらに第三区として、小笠原諸島の東南にある「マゼラン群島」「アンソンズ群島」を選ぶ。これらの群島はハワイ政府に属するのが僅か一三島あるのみで、その他はことごとく無主の島嶼であると聞くので、優先的に出稼ぎへ当てべきである、と説いた。

これらの経営が緒についた暁には、いわゆる「南緯諸島」にまで及ぼうとする気概であった。「マゼラン群島、アンソンズ群島は小笠原諸島の東南に

ある、とされているが、所在は不詳である。モテラー『太平洋諸島の名称』(一九八六刊)にも記載されていない。「南緯諸島」は赤道を越える南太平洋の諸島をいう

『明治丸』に乗船・探検

北海道を棄てて、なぜ遠く南洋に進むことを図るのか、との反論にも横尾は東西南北のいずれにも向かう。ただ、欧米諸国によって太平洋が探求されている現況を知るべきであると答えている。

明治十九年五月、ようやく風帆船を購入したが、実施不能となり、翌二十年十一月、逋信省灯台局巡廻船「明治丸」(現在・東京商船大学で保存)に乗船して、横尾は小笠原諸島から硫黄島までを探検する。同船には東京府知事・高崎五六ほか官民合同による総勢四〇余名が同乗した。このなかには鈴木経勲が参加していた。

横尾の出発を前にして、報道されたニュースもあった。十月二十一日付の『高知日報』によると

今後ボルカノ無人島(注・硫黄島を指す)の内部を探り、都合に依れば其処にそのまま移居せんとの雄志を起し、まず試みのため近々の内に出発するよし。右ボルカノ島は小笠原島を距る三百哩の正南にありて、三小嶼相鼎立し何れも樹木鬱葱たり。殊に島中硫黄など

には最も富むといえ、種々面白
き鉱物もあらん。また未だ世に知
られざる珍卉異草もあらん。とに
かく持主のなき孤島の事ゆえ人の
取るに任す。誠に結構なる拾い物
というべし。(新仮名づかい)

明治丸は十一月十日、硫黄島沖に投
錨、一行は島内を検分したが、樹木は
少なく、水源も見当たらずとみて、開
拓する余地はないと判断された。南・
北硫黄島の探検は、船長の英人アルレ
ンが石炭の欠乏と航路不案内を訴えた
ので実施されなかった。

十一月十七日横濱に帰着、南洋探
検の名と、その主唱人である横尾に
はマスコミの来訪が相次いだ。『朝野
新聞』は、同二十三日付で横尾の話を
聞いている。横尾の年来の宿志であっ
たことを知っていたからだろう。

近年本邦の人口は漸々増加して、
貧民は益々その数を多くし、この
ままにて捨て置かば必ず他日に於
て畏るべき惨状を呈すならんと、
同氏は夙にここに着目し、まず南
洋群島の中に於て土地を開墾し、
人民の移住を図るこそ今日の急務
ならんと思いたし……

と、今回の航海を開くことになった
理由を改めて説き、「想像せし所と相
違」したと報告している。

しかし、横尾は、硫黄島に数十町歩

(五十町として五〇万平方)の耕地
を設ける余地があり、また北硫黄島に
は樹木があつて移住に適せり、と有望
なことを主張した。「忙火山」の称を
島名に与えている。

硫黄島の存在は、ヨーロッパ人によつ
て一六世紀から知られていた。一五四
三年(天文十一年)九月三〇日、スペ
インの東洋遠征艦隊に属する「サン・
ファン」号がフィリピンから東航中に
三島嶼を目付け、「ロス・ボルカネス」
(火山列島)と命名した。そのあと、
一七七九年(安永八年)十一月五日、
ジェームズ・クックの死後、「レゾリュ
ション」号がカムチャツカから南航中
に三島嶼に気づき、その最大島に「サ
ルフア・アイランド」(硫黄島)と命
名した。

横尾が「忙火山」と名づけたのは英
人フィンドレーの水路誌を抄訳した
『南洋群島独案内』(明治二十一年八月
刊)ですでに承知したのであろう。

横尾の調査に刺激されて、硫黄島に
渡航する者がつづき、明治二十二年に
開拓住民を見るに至った。そのため明
治二十四年九月九日、日本政府は勅令
をもって硫黄島、北硫黄島、南硫黄島
の三島を日本の領土として宣言したう
え、東京府の所管に決めた。横尾にとつ
ては、無所属の島嶼が正式に日本領土
となつたのは勲章ものであった。

明治丸で往復した際、鳥島へ玉置半

右衛門と一二名を上陸させたが、帰路
に激浪のため置き去りにした事件あつ
た。ところが、玉置たちはアホウドリ
で無尽の財産をうる事ができた。

士族授産金で南洋貿易

硫黄島の採掘権が検討されているう
ちの明治二十二年秋、高崎・東京府知
事は、早晚処分されるべき士族授産金
五万円を使用して「南洋貿易」を事業
として起こすことを目論んだ。田口卯
吉(鼎軒)ほか二名を招いたが、応じ
られない。そこで二十三年に横尾を仙
台から招いて「貿易事務総裁」の任を
委嘱したが、資金の取扱いが妥当でな
いと、三月になって横尾は計画から退
いた。たまたま鈴木経勲が太平洋航海
から帰朝したので、参加を勧められ、
田口ほかによる「南島商会」の企画に
加わった。五月には「天祐丸」による
南洋貿易が実施された。

それに対抗するように、横尾は同じ
明治二十三年十月、株式会社・恒信社
を創立、みずから社長に就任して、十
二月二十五日「懐遠丸」(七二ト)で
横濱を出港して、南洋貿易を競った。

同船はサイパン島をはじめポナペ島
(現・ポーンペイ島)まで巡航して、
翌二十四年八月横濱に帰着した。帰着
の前に、榎本武揚は横尾の現況を聞いて
「懐遠丸ハ稍予期ノ目的ヲ達シ得ベ
シ」と喜びの手紙を発している。

これ以後、明治二十八年まで、第九

航まで貿易をつづけ、懐遠丸は売却し
た。二十九年、大喜丸を借りたが、パ
ラオからの帰途、御蔵島で衝突して船
体を粉碎された。次いで清徳丸を借り
たが、これも種ヶ島に漂着して船体を
破損させた。この損害につづき、三十
年に松阪丸(一九〇ト)を購入して
第一航を実施、年次の飛んだこともあつ
たが、三十六年第七航のおわつたあと
の七月二十一日、横尾は急逝した。六
十五歳であった。

横尾自身が提唱した「南洋移住と貿
易計画」は、必ずしも大成をえなかつ
たが、後輩を育てたことを以て冥すべ
きであった。(松永 秀夫)

「おもな参考文献」

山田毅一『南進策と小笠原群島』大正
五年、放天義塾
野口正幸『パラオ島夜話』昭和十六年、
建設社出版部

竹下源之介『横尾東作と南方先覚志士』
(南洋資料・第二五八号) 昭和十
八年、南洋経済研究所

大熊良一『歴史の語る小笠原島』昭和
四十三年、南方同胞援護会

小玉晃一・小玉敏子『明治の横濱』昭
和五十四年、笠間書院

大熊良一『小笠原諸島異国船来航記』
昭和六十年、近藤出版社

荒俣 宏『黄金伝説』平成二年、集英社
笠原 淳『ヨコハマ夢譚』平成三年、
白水社